

書 評

いう仕事の困難さといった立場から、教師の勤務条件を抜本的に検討する必要がある。その部分から出発しないかぎり、事態はなんらかわらない」と主張する。

この論稿は、従来見落とされがちであった教師のストレスを改めて問うものであり、極めて貴重な指摘を多く含む論稿である。評者の小規模な調査でも、都市部を中心として教師バーンアウト現象が、わが国でも目立つようになってきている。もちろん労働市場の変容の問題ともかかわるが、教師たちが仕事の困難に耐えかねている現状というのは、今日無視できない程度にまでたかまっているといえることが考えられる。

ただ、秦氏が結論として強調される「教師を取り巻く環境や、教師という仕事の困難さといった立場から、教師の勤務条件を抜本的に検討する必要がある」という場合の、教師の勤務条件の抜本的検討とは、具体的にはどのようなことであろうか。秦氏自身が指摘されているように、教師の多忙の問題は、単に物理的多忙にのみ起因するのではなく、教師役割の無限定性にも多くよるものである。とすれば、必要なのは、まず何よりも新

しい教師モデルの提示とそれに向かっての合意であり、単に勤務条件を云々するというだけでは本質的な解決にはならないのではなかろうか。これまた秦氏自身が指摘されるように、教師集団内に、特定の教師に対する集団的排斥、いじめまであるという現状がめだつならば、なおさらのこと、単に勤務条件を再検討することだけではすむ問題ではないのではないか。転換期における教師モデルの再検討という枠組みのもとでの、教師の勤務条件の再検討が必要なのである。秦氏のいう「勤務条件の再検討」ということがどのような内容なのか、もう少し明らかにしてほしかったというのが率直な感想である。

以上、雑駁ながら感想を述べてきた。全体としてみると、現代の公立中学校が、「公立」の故に、また、義務教育の完成段階と中等教育の前半という二つの位置づけのはざまに、社会変動の波に大きくゆらいでいる状況を、多面的に明らかにした格好の解説書として高く評価できる。

◆四六判 240頁, 1200円

日本放送出版協会

■ 書 評 ■

森田尚人・藤田英典・黒崎勲・片桐芳雄・佐藤学 編

『教育学年報 1 教育研究の現在』

名古屋大学 今津 孝次郎

1

本書は五人の教育研究者の編集による『教育学年報』の創刊号である。編者はそ

れぞれ教育思想史、教育社会学、教育行政学、日本教育史、教育方法学と専攻を異にするが、1951年生まれの佐藤を除

き、他の4人は同じく1944年生まれであり、すべて40代に属する中堅世代である。

本書でまず注目すべきことは、年報創刊の趣旨のなかに、50年にわたってわが国の教育研究を主導してきた日本教育学会編『教育学研究』に対して、新しい流れを作り出そうとする挑戦としての狙いが込められていることである。冒頭の「創刊にあたって」と巻末の「あとがき」は、創刊のマニフェストであり、短い表現ながらも編者たちの熱っぽい問題意識が伝わってくる。

「われわれに共通するのは大学闘争前後に生涯のしごととして教育学研究をこころざし、しかしその後ずっとわが国の教育学の主流に対して違和感を感じつけてきたことである」（「あとがき」より）。「戦後教育学の枠組を自覚的に問い直す新しい研究者世代の形成のためには、自己の所属する機関の紀要に研究成果を発表するだけでは十分とはいえない。さまざまな批評や批判のなかに身を置く、より積極的な活動が必要である。本書はそうした者のためのホームグラウンドとなることを願って、創刊される。」（「創刊にあたって」より）。

編者たちの世代の特徴は、戦後民主主義教育のなかで育ち、大学時代には学問や研究がラディカルに問い直されるという状況を経験しながら教育研究を学び始めたということである。したがって、これまで教育学界を中心的に支えてきた先輩研究者の世代が敗戦による価値の転換を経験し、戦後民主主義教育という時代の息吹のなかで教育研究を始めたのに対

して、その後に来たる編者たちの世代が「違和感を感じ」「戦後教育学の枠組を自覚的に問い直す」という問題意識をもつのも当然の成り行きとあってよいだろう。その意味で、本書は教育学研究者の世代交替が確実に進んでいることを示すひとつの具体的な証左でもある。

しかも、その交替は時間的経過による自然な世代交替ということ以上の意味も持っている。つまり、研究の基本枠組や基本方法に関して従来のものに代わる新しいパラダイムを編者たちが提案しているということである。もちろん、年報という性格上、多様な論文が収録されているから、全体として体系立った論議のなかで首尾一貫した主張が貫かれているわけではないけれども、提案をごく大雑把に整理すれば次の二つになると思う。第1は、ポストモダン論をめざすこと。第2は、狭い専門領域への分極化を打破して学際的な研究交流をめざすこと。

2

本書は4部から構成されている。目次を紹介しておきたい。なお原著には記されていないが、4部の分類と各論文に番号を付しておく。

1 教育研究の現在

1. 教育の概念と教育学の方法—勝田守一と戦後教育学—（森田尚人）2. 教育権の論理から教育制度の理論へ（黒崎勲）3. 「パンドラの箱」を開く＝「授業研究」批判（佐藤学）4. 教育史研究論ノート（片桐芳雄）5. 教育社会学におけるパラダイム転換論—解釈学・葛藤論・学校化論・批判理論を中心として—（藤田英典）

II 教育改革の動向

1. 歴史的視座から見た<再構造化>—ユートピアへの鋳掛け作業— (D・タイヤック) 2. 中教審は変わったか (天野郁夫) 3. 「大学問題」を見る (寺崎昌男)

III 研究論文

1. 近代イギリスにおける<学校教育>の誕生—「公私教育論争」の分析を中心として— (安川哲夫) 2. コンドルセ 1770年代—公教育論以前— (田原宏人) 3. 大正期における一体罰事件をめぐる議論の展開—<教育問題>の歴史的検討— (廣田照幸) 4. 「大正デモクラシー」と優生学—「自由教育」論者の能力観の一側面— (高木雅史) 5. サッチャー政権下の教育改革 (大田直子)

IV 研究動向

1. ドイツ教育学の現在—「ポストモダン」のあとに— (今井康雄)

ところで、ポストモダン論をめざす具体的な作業課題を、評者なりにごく一般的に整理してみると、①普遍的・絶対的なものとして信じ込まれてきた「近代的思惟」を相対化し、近代的思惟の特徴とそれを産出し支えてきた社会的諸条件を解明すること、②最近さまざまな領域で観察されるようになってきた「近代的な生活様式」の変動を検討し、その変動に対応した新しい思惟様式を定式化すること、の二つを挙げることができよう。もちろんポストモダンはモダンの単純な否定ではないし、モダンやプレモダンのなかにモダンを乗り越える手掛かりを探し出すことも可能である。

以上の整理に基づきながら、本書の内容構成を検討してみよう。ポストモダン

をめざすという本書の第1提案は、一方では日本の戦後教育学の理論的枠組の問題点を指摘すると同時に (I-1~4)、他方では海外の議論も含めてポストモダンの理論動向を探る作業が展開されている (I-5, IV-1)。要するに、学校や教育が「善きもの」であり、「主体」としての個人の「発達」を保障するという基本的前提に立って議論を組み立てるという近代的な思惟方法を相対化することである。この相対化作業を補強する議論として、Ⅲに配置されたいくつかの論文を読むことができるだろう。また、近代的思惟方法とも関連するが、戦後日本の教育学にしばしば見られた啓蒙主義的で固定的な認識枠組や教条主義的なイデオロギーに呪縛されないということも、IとⅢの諸論文にほぼ共通して含まれている関心点である。

というわけで、上記①の作業課題は積極的に取り組まれている。Ⅲの諸論文にも表れているように、本書に歴史研究が目立つのも、その積極性を物語っている。しかし②の課題についてはどうだろうか。昨今の教育研究に関するポストモダン論は総じて①に比重がおかれ②が弱いように感じられるのだが、本年報はこれからも①に主題を置くという方針なのだろうか。近年、現実が研究を乗り越えて急速度で動いており、何からどう手をつければよいのか、研究側に戸惑いさえ感じられるだけに、私たちの目の前に突きつけられているさまざまな教育問題を②の観点から捉え直す作業はどうしても必要である。年報はぜひそうした作業も目指していただきたい。

3

次に、分極化する専門分野を越えた交流をという第2提案に異議はない。ただ、教育史や教育社会学、教育方法学などといっても、それらは教育研究のごく些細な専攻分野の区別にすぎない。文部省科研費の分類にしても「心理学」「社会学」「教育学」「文化人類学」が同じ「分科」にくくられているほどである。近年、周辺諸科学が教育問題に大きな関心を寄せているのであるから、研究交流はより広い関連領域を視野に入れてよいのではないだろうか。少なくとも（臨床）心理学と文化（教育）人類学との交流まで広げるくらいは考えてよいだろう。

もちろん、そういった各領域の論文を単に並べてみても交流にはならない。相互の対話をはかるには、たとえば目の前に突きつけられている具体的な教育問題を対象にして学際的に共同研究してみるという方法がある。また、各領域を横断するような概念そのものについて検討してみるという方策もあるだろう。本書では第I部を中心として「再生産」とか「秩序」「統制」「再構造化」（リストラクチャリング）あるいは「社会史」といったキーワードが登場するが、本書ではあまり扱われていない「カリキュラム」といった用語も加えるなら、こうしたキーワードは、伝統的な領域分類を打破する性質をもっているのである。今後計画されていることとは思うが、新しい流れを作り出すというのであれば、ぜひ思いきった交流企画を立ててほしいと思う。エスタブリッシュメントを撃つ営為も、下手をするとそれ自体がエスタブリッシュ

メントに転化する危険性を常に内包していることに留意したい。

さて、本年報は理論志向や純粋学術研究的色彩を強く持っていると感じられるだけに、あとひとつだけ論点を指摘しておきたい。それは、ポストモダンをめざす教育研究は学校をはじめとする教育実践現場にいかにか寄与できるか、という問題である。それは、②「近代的生活様式」の変動に対応した新しい思惟様式の定式化をどう追求するか、という課題にもつながる。この点の検討が今求められているのではないだろうか。

第II部では、教育改革が取り上げられているけれども、大学改革の動きをみていると、教育学や教育研究それ自体が厳しい状況に置かれていくだろう。そうした状況と急激に変化する社会の現実を見据えるならば、この年報に期待されるものは、創刊の趣旨以上のものがあるように思う。本書は創刊記念号ということで380頁という豪華な本となったが、学術雑誌や学術書を刊行するのは容易な事業ではない。编者諸氏の労苦は並大抵のものではないだろうと想像すると、あまり無理をされないで息長く続く取り組みを、と祈らないではいけない。

◆A5判 380頁, 3605円

世織書房